

(9) ICF の概念を支える用語に関する研究

川崎医療福祉大学大学院 医療情報学専攻 博士課程 榎部 公一

川崎医療福祉大学 医療情報学科 岡田美保子 三田 勝己

【要 旨】

障害に関する国際的な分類として「ICF (International Classification of Functioning, Disability and Health): 国際生活機能分類」がある。ICF は、2001年5月、第54回 WHO 総会において採択された。ICF は、単に心身機能の障害により生活機能の障害を分類しようとするのではなく、活動や社会参加、環境因子に注目している点に特徴がある。ICF については、障害や疾病を持った人やその家族、保健・医療・福祉等の幅広い分野の従事者の間で、障害や疾病の状態についての共通理解を可能とするための活用、さらに障害者に向けたサービスの計画・評価・記録や、障害者に関する統計などへの活用が期待されている。

発表者らは、特に ICF の「活動と参加」の領域に焦点をあて、家族や介護職等による「在宅での日常生活の記録」を支援することを主たる目的として、ICF のコード検索やナビゲート機能を有したブラウ

ジングツールを開発している。

今回は、利用者の目的とする ICF コードへの到達を支援するために、ICF の項目と関連のある基本的用語の整理と関連度のスコア付けを行い、用語辞書の開発を試みた。用語辞書の開発は、ICF の「活動と参加」の領域に限定し、各項目の「項目名」「定義」「含まれるもの」を対象とした。用語抽出の手順は次のとおりである。1)「茶釜」と「和布蕪」を用いた形態素解析の実施、2)形態素解析の結果に対する中川らのルールを用いた複合名詞の抽出、3)中川らの手法を用いた複合名詞の関連度のスコア付け。形態素解析結果の差分語と複合名詞の差分用語に対して妥当性の確認を行ったところ、「和布蕪」の方が良い結果を示し、「和布蕪」を基に用語抽出することとした。形態素解析の結果には、一部、不適当なものが含まれ、自動抽出の方法に改善をはかる必要がある。また、用語辞書については、今後、実際の利用を通じて評価する必要がある。